慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	実朝の本歌取の歌
Sub Title	"Honkatori (Echoing Imitation) " in Sanetomo's poetry
Author	松原, 多仁子(Matsubara, Taniko)
Publisher	慶應義塾大学藝文学会
Publication year	1966
Jtitle	藝文研究 (The geibun-kenkyu : journal of arts and letters). Vol.21, (1966. 4) ,p.1- 28
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00072643-00210001-0001

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

実朝の本歌取の歌

松原多仁子

新古今集時代にさかんに試みられた本歌取について、定家は近代秀歌の中で、「ふるきをこひねがふにとりて、昔のうたのことばをあらためず、よみすへたるをすなはち本歌とすと申す也。」とのべて、本歌取を作歌の技法として教えているのであるが、実朝が定家に歌の指導をうけるようになったのは、吾妻鏡に記録のある、承元三年七月、実朝一八歳の時に、自作の歌三十首の合点を定家に頼んで以来であろうと思われる。翌月、定家のもとより合点を加えた歌が返進されると共に、歌論の書が贈られた。実朝はその時までにすでに新古今集（元久二年、一四歳）、古今集（承元二年、一七歳）を入手していたが、歌論の書を手にしたのはこの時が初めてであったろうと思われる。吾妻鏡には、「知親自三京都一皈参、所レ被レ遣三干京極中将定家朝臣一之御歌、加三合点一返進、又献三詠歌口伝一巻一、是六義風躰事、内々依レ被三尋仰一也」と記されてをり、この詠歌口伝は、近代秀歌をさすと考えられている。吾妻鏡の記事はごくあっさりと記されているが、実朝が定家から歌論の書を贈られ、作歌の際の手がかりを得た喜びは非常なものであったろうと想像される。実朝は、この近代秀歌の教えるところによって、一心に歌の勉強をしたことゝ思われるが、いまここに、「本歌取」に関して、実朝の歌

にいかに定家の影響がみられるか、すなわち、実朝の歌の中に、定家の説く本歌取の技法によって詠んだ歌がどのくらいあるであろうかという点から、金槐集の歌をみてみたいと思う。

定家の本歌取に関する論は、近代秀歌のほかに詠歌大概や毎月抄の歌論書においてもみられるのであるが、吾妻鏡によると、建暦二年五月二日、「筑後前司頼時、去夜自京都下向、定家朝臣進消息並和歌文書等、今日持参御所」、建保元年八月一七日、「京極侍従三位定家付二条中将雅経朝臣、献和歌文書等於将軍家、蓋是先日被尋仰之故也、件双紙等、今日到着于広元朝臣宿所、即持参御所之処、御入興之外無他云々」、という工合に、実朝は、近代秀歌のほかにも定家のもとより和歌文書を贈られている形跡があり、詠歌大概は成立年代ははっきりしないものの、内容が近代秀歌に近い点などからも、そう後年のものではないと考えられるので、詠歌大概をも実朝は見ていたであろうと考えることができると思う。毎月抄は、その奥書に「承久元年七月二日、或人返報云々」とあり、実朝の殺せられた承久元年一月二七日より後の成立ということになるので、一応この場合には除外して考察をすすめていきたいと思う。

さて、近代秀歌および詠歌大概にみられる本歌取に関する定家の見解を要約してみると、

一、五七五の七五の字をさながらをき、七七の字をおなじくつづけつれば、新しき歌にきゝなされぬところぞ侍る。

一、五七の句はやうによりて去るべきにや侍らん。たとへば、「いその神ふるきみやこ」「郭公なくやさ月」「ひさかたのあまのかぐ山」「たまぼこのみちゆき人」など申すことは、いくたびもこれをよまでは歌いでくべからず。「年の内に春はきにけり」「そでひぢてむすびし水」「月やあらぬ春やむかしの」「さくらちるこのしたかぜ」などはよむべからずとぞをしへ侍りし。

一、今の世に、かたをならぶるともがら、たとへば世になくとも、きのふけふといふばかりいできたるうたは、ひと句もその人のよみたりしと見えんことを、かならずさらまほしく思ふたまへ侍るなり。（近代秀歌）

一、取古歌詠新歌事、五句之中及三句者頗過分無珍気、二句之上三四字免之

一、猶案之以同事詠古歌之詞頗無念歟、以四季歌詠恋雑歌、以恋雑歌詠四季歌、如此之時無取古歌之難歟

あし引の山ほとゝぎす　みよし野の芳野の山　久かたの月のかつら　郭公なくやさ月　玉ぼこの道ゆき人

如レ此事全雖二何度一不レ憚レ之

としのうちに春はきにけり　月やあらぬ春やむかし　さくらちる木のした風　ほのぼのとあかしの浦

如レ此類雖二句一更不レ可レ詠レ之

以上のようであり、近代秀歌にみられる本歌取の技法に関する論は、詠歌大概にいたって、一層具体的なものとなっていると思われる。

いま、貞享本金槐和歌集七一六首の歌について、まず本歌取の歌とみなされるものを抜き出してみたところ、次表のごとく、金槐集の歌の二七パーセントが本歌取りの歌という結果が出た。本歌を求めるに際しては、「今の世に、かたをならぶるともがら、たとえば世になくとも、きのふけふといふばかりいできたるうたは、ひと句もその人のよみたりしと見えんことを、かならずさらまほしく思ふたまへ侍るなり」という近代秀歌の言葉によって、実朝も本歌取を試みたであろうことを考慮しつつ、主として「万葉集」と「八代集」の中に本歌を求めた。

	春 一三二部	夏 四七部	秋 一三二部	冬 九五部	恋 一五五部	雑 一五五部	計 七一六首
本歌取の歌	五一首	一〇首	四〇首	二〇首	四二首	三二首	一九五首
パーセント	三九%	二一%	三〇%	二一%	二七%	二〇%	二七%

ところで、金槐集の中には、本歌の字句を「題詞」にたてている歌が三首みられる。

（本歌）秋の野におく白露は玉なれやつらぬきかくるくもの絲すぢ（古今集）

秋の野におく白露は玉なれやといふことを人々に

おほせて、つかうまつらせし時よめる

257さゝがにの玉ぬく絲の緒を弱み風に乱れてつゆぞこぼるゝ

（本歌）住の江の松を秋かぜふくからに声うちそふる沖つしら浪（古今集）

こゑうちそふるおきつしら浪といふ事を人々

あまたつかうまつりし次（ついで）に

269 住吉（すみのえ）のきしの松吹秋風をたのめて浪のよるを待ける

（本歌）あなこひし今もみてしが山がつの垣ほにさけるやまとなでしこ（古今集）

今も見てしが山がつといふことを

557 山がつのかきほに咲るなでしこの花の心をしる人のなき

これらの歌も本歌取の歌といえると思うが、いわゆる一般的にいう本歌取ということとは少し違うように思われるので、右の計上からは除外した。

さて、実朝がいかに定家の説に忠実に本歌取を実行しているか、すなわち、定家的な意味における本歌取の歌が、金槐集中に何首あるであろうか、という点につき、考察をすすめてみたいと思う。まず、「以二四季歌一詠二恋雑歌一以二恋雑歌一詠二四季歌一」という点から、四季の歌を本歌として恋雑の歌を詠んだもの、および、更に範囲を広げて、雑歌その他の歌を本歌として恋歌を詠んだもの、恋歌その他の歌を本歌として雑歌を詠んだものをもみていくと、つぎのようであった。

四季歌→恋歌　七首
　　↙
　　雑歌　五首　＼一二首

雑歌→恋歌　九首

東歌→恋歌　一首

恋歌→雑歌　五首
東歌→雑歌　一首
賀歌→雑歌　四首　「定家所伝本においては四首ともに「賀部」の歌として部類分けされている」
離別→雑歌　二首
羈旅→雑歌　(一)首　「定家所伝本においては「旅部」の歌として部類分けされている」
神楽歌→雑歌　一首
神祇→雑歌　二首

さらに、恋雑の歌を本歌として四季の歌を詠んだもの、およびその他の部類の歌を本歌として、四季の歌を詠んだものをみていくと、つぎのような結果がでた。

恋歌→四季歌　四首
雑歌→四季歌　六首　一〇首
賀歌→四季歌　三首
東歌→四季歌　一首
羈旅→四季歌　三首
挽歌→四季歌　一首

同じ四季の歌の中でも、夏・秋・冬の歌を本歌として春の歌を詠んだものが一五首、春・秋の歌を本歌として夏の歌を詠んだもの六

首、春・夏・冬の歌を本歌として秋の歌を詠んだもの六首、春・秋の歌を本歌として冬の歌を詠んだものが二首、という状態がみられた。「春の歌をば秋・冬などによみかえ……」というのは、毎月抄の中にみられるところであるが、先にものべたように、実朝が毎月抄をも読んでいたであろうと考察することはその奥書の日附から考えて無理がある。しかし、いま定家の本歌取に関する見解にもとづき金槐集の歌をみていくに際し、近代秀歌や詠歌大概にみられる定家の見解をいま少しおしすすめて、右のごとく、四季間における詠みかえの状態をもみてみたのである。

次に、「五句之中及三句一者頗過分無二珍気一二句之上三四字免レ之」にもとづき、本歌より取っている字句の数の上から、金槐集中の本歌取の歌をみていき、定家の説く本歌取にかなう歌が、どれくらいあるか考察してみた。すなわち、本歌の言葉を二句と三・四字以内の範囲において用いている歌を書き出してみた。

（春部）

一、今朝みれば山も霞て久方の天の原より春は来にけり
　　み吉野は山も霞みて白雪のふりにし里に春はきにけり（新古今集）

二、九重の雲井に春ぞ立ぬらし大内山に霞たなびく
　　ほのぼのと春こそ空にきにけらし天の香具山霞たなびく（新古今集）

三、山里に家ゐはすべし鶯のなく初こゑのきかまほしさに
　　梓弓春山ちかく家居してたえずききつるうぐひすの声（新今古集）
　　初声のきかまほしさに時鳥夜深くめをもさましつるかな（拾遺集）

五、かきくらし猶ふる雪の寒ければ春ともしらぬ谷の鶯
　　かきくらし雪はふりつつしかすがにわぎへの園に鶯ぞなく（後撰集）

六、春はまづ若菜つまむと占めおきし野辺とも見えず雪のふれれば
　あすからは若菜つまむとしめし野に昨日も今日も雪はふりつつ（新古今集）
八、塩がまのうらの松風霞なりやそしまかけて春や立らむ
　しほがまの浦ふく風に霧はれて八十島かけてすめる月影（千載集）
一〇、大かたに春のきぬれば春霞四方の山辺に立みちにけり
　君により吾が名は花に春霞野にも山にもたちみちにけり（古今集）
一六、春雨の露もまだひず梅が枝にうは毛しをれて鶯ぞ鳴
　むらさめの露もまだひぬ槙の葉に霧たちのぼる秋の夕ぐれ（新古今集）
一七、若菜つむ衣手ぬれて片岡のあしたの原に淡雪ぞふる
　君がため春の野にいでて若葉つむわが衣手に雪はふりつつ（古今集）
二〇、春きては花とかみえむおのづから朽木の杣にふれる白雪
　春きては花ともみよと片岡の松の上葉に淡ゆきぞふる（新古今集）
二三、春風はふけど吹かねど梅花さけるあたりはしるくぞありける
　梅の花匂ふ春べはくらぶ山やみにこゆれどしるくぞありける（古今集）
二四、梅花さけるさかりをめのまへにすぐせる宿は春ぞすくなき
　徒らにすぐる月日はおもほえで花みてくらす春ぞすくなき（古今集）
二五、我宿の八重の紅梅咲にけり知るもしらぬもなべて訪はなむ
　筑波ねの峯のもみぢ葉おちつもり知るも知らぬもなべてかなしも（古今集）
二六、咲しよりかねてぞをしき梅花散りの別れは我身とおもへば

ちらねどもかねてぞ惜しきもみじ葉は今は限りの色とみつれば（古今集）

二七、我袖に香をだにのこせ梅花あかでちりぬる忘れがたみに
ちりぬとも香をだに残せ梅の花こひしき時のおもひ出にせむ（古今集）

二九、鶯はいたくなわびそ梅花ことしのみ散るならひならねば
しるしなきねをもなくかな鶯の今年のみ散る花ならなくに（古今集）

三二、誰にかもむかしをとはむ故郷の軒ばの梅は春をこそしれ
たれをかも知る人にせむ高砂の松もむかしの友ならなくに（古今集）

三七、梅花色はそれともわかぬまで風にみだれて雪はふりつゝ
梅の花技にか散るとみるまでに風にみだれて雪ぞちりたる（万葉集）

三八、我宿の梅のはつ花咲にけり待つ鶯はなどか来なかぬ
藤浪のしげりはすぎぬ足引の山ほととぎすなどか来鳴かぬ（万葉集）

四三、あさみどりそめてかけたる青柳の絲に玉ぬく春雨ぞふる
浅みどり絲よりかけてしらつゆを玉にもぬける春の柳か（古今集）

四四、ささわらびのもえ出る春に成ぬれば野辺の霞もたなびきにけり
岩そそぐ垂水の上のさわらびの萌えいづる春になりにけるかな（新古今集）

四七、みよしのの山したかげの桜花咲きてたてりと風にしらすな
足引の山がくれなるさくら花ちり残れりと風に知らるな（拾遺集）

五〇、みよし野の山にこもりし山人や花をばやどの物に見るらむ
今はわれ吉野の山の花をこそ宿のものとも見るべかりけれ（新今古集）

五九、今しはと思ひし程に桜花ちる木のもとに日かずへぬべし
今よりは紅葉のもとに宿りせじ惜しむに旅の日数へぬべし（拾遺集）
六〇、木のもとにやどりはすべし桜花ちらまくをしみ旅ならなくに
秋の野に宿りはすべし女郎花名をむつましみ旅ならなくに（古今集）
六六、名にし負はばいざ尋ねみむあふ坂の関路に匂ふ花はありやと
名にしおはばいざことはむ都鳥わが思ふ人はありやなしやと（古今集）
六八、逢坂の関の関屋の板びさしまばらなればや花のもるらむ
播磨路やすまの関屋の板びさし月もれとてやまばらなるらむ（千載集）
七一、行て見むと思しほどにちりにけりあやなの花や風たゝぬまに
起きて見むと思ひし程に枯れにけり露よりけなる朝顔の花（新古今集）
七三、春くれど人もすさめぬ山桜風のたよりに我のみぞとふ
山高み人もすさめぬ桜花いたくなわびそわれ見はやさむ（古今集）
七七、山風のさくらふきまきちる花のみだれて見ゆる志賀の浦波
桜さく比良の山かぜふくままに花になりゆく志賀の浦浪（千載集）
八八、今年さへとはれで暮ぬ桜花春もむなしき名にこそ有けれ
今年さえ志賀の弥生の花ざかり問はれで暮れぬ春の故郷（後鳥羽院御集）
九〇、さゝ波や志賀の都の花盛風よりさきに訪はましものを
足引の山のもみぢはちりにけり風より先に見てましものを（後撰集）
九一、春ふかみ嵐の山のさくら花咲くと見しまに散にけるかな

うつせみの世にも似たるか桜花さくとみしまにかつ散りにけり（古今集）

一〇三、ながめつゝ思ふもかなしかへる雁行らむかたの夕ぐれのそら
ながめつつ思ふもさびし久方の月のみやこの明方のそら（新古今集）

一〇九、立かへり見てもわたらむ大井川かはべの松にかゝる藤なみ
春ふかみ井手の川浪たちかえりみてこそゆかめ山吹の花（拾遺集）

一一〇、田子の浦の岸の藤なみ立かへりをらではゆかじ袖はぬるとも
よそにのみ見つつは行かじ女郎花をらむ袂は露にぬるとも（後拾遺集）

一一一、いとはやも暮ぬる春か我宿の池の藤なみうつろはぬまに
いとはやも鳴きぬる雁か白露のいろどる木々も紅葉あへなくに（古今集）

一一二、故郷の池の藤なみたれ植てむかしわすれぬかたみなるらむ
いそのかみふる野の桜たが植ゑて春は忘れぬかたみなるらむ（新古今集）

一一四、款冬の花の盛りになりぬれば井でのわたりにゆかぬ日ぞなき
山吹の花のさかりの井手に来てこの里人になりぬべきかな（拾遺集）

一一五、玉もかる井でのしがらみ春かけて咲や川瀬のやまぶきの花
たまも刈る井手のしがらみうすみかも恋の淀めるわが心かも（万葉集）

一一七、声たかみかはづなくなり井での川岸の款冬いまはちるらむ
あしびきの山吹の花ちりにけり井手の蛙は今やなくらむ（新古今集）

一一九、いま幾日春しなければ春雨にぬるとも折らむやまぶきの花
ぬれつつぞしひて折りつる年の内に春は幾日もあらじと思へば（古今集）

一二九、朝きよめ格子な上げそ行く春を我閨のうちにしばしとゞめむ
殿守の伴のみやつこ心あらばこの春ばかり朝ぎよめすな（拾遺集）

（夏部）

一三六、我宿の垣ねにさける卯の花はうきことしげき世にこそ有けれ
鶯のかよふ垣ねの卯の花のうき事あれや君が来まさぬ（万葉集）

一三八、五月待小田のますらをいとまなみ堰きいるる水に蛙なくなり
雨ふれば小田のますらを暇あれや苗代水を空にまかせて（新古今集）

一三九、郭公必ず待つとなけれども夜な〳〵目をもさましつるかな
二声ときくとはなしに時鳥夜ふかくめをもさましつるかな（後撰集）

一四九、足引の山時鳥木隠れて目にこそ見えねおとのさやけき
秋萩をしがらみふせてなく鹿のめには見えずて音のさやけさ（古今集）

一六一、うたゝねの夜の衣にかをるなりものおもふ宿の軒の立花
たちばなの匂ふあたりのうたたねは夢も昔の袖の香ぞする（新古今集）

一七一、泉川はゝその杜になく蟬のこゑのすめるは夏のふかさか
一つ松幾世かへぬるふく風の声の澄めるは年ふかみかも（万葉集）

一七二、夏ふかみ思ひもかけぬうたゝねの夜の衣に秋風ぞふく
夏衣まだひとえなるうたたねに心して吹け秋のはつ風（拾遺集）

一七五、きのふまで花のちるをぞ惜こし夢かうつゝか夏も暮にけり
いつのまに紅葉しぬらむ山桜昨日か花の散るを惜しみし（新古今集）

（秋部）

一八一、ながむれば衣手さむし夕月夜佐保の川原のあきの初風
　ながむればころもで涼し久方の天のかはらの秋の夕ぐれ（新古今集）

一八三、霧たちて秋こそ空にきにけらし吹上の浜の浦の塩風
　ほのぼのと春こそ空に来にけらし天の香具山霞たなびく（新古今集）

一八四、うちはへて秋は来にけり紀の国や由良のみ崎の蜑のうけ縄
　うちはへて苦しきものは人めのみ忍の浦の海士の桂縄（新古今集）

一九〇、ことしげき世をのがれにし山里にいかで尋て秋の来つらむ
　ことしげき世を遁れにしみ山べのあらしの風も心して吹け（新古今集）

一九六、天の川霧たちわたるひこ星のつまむかへ舟はやもこがなむ
　彦星のつまむかへぶねこぎ出らし天の河原に霧のたてるは（万葉集）

一九九、いまはしもわかれもすらし棚機の天の河原にたづぞ鳴なる
　たなばたは今や別るる天の川川霧たちて千鳥なくなり（新古今集）

二〇三、野辺に出てそぼちにけりなから衣きつゝわけゆく花の雫に
　山ぢにてそぼちにけりな白露の暁おきの木々のしづくに（新古今集）

二〇七、秋風はいたくな吹そ我宿のもとあらの小萩ちらまくも惜し
　春雨はいたくなふりそ桜花まだみぬ人にちらまくもをし（新古今集）

二〇九、路のべの小野の夕霧たちかへり見てこそ行かめ秋萩の花
　春ふかみ井手の川浪たちかへりみてこそ行かめ山吹の花（拾遺集）

二一二、たそがれに物思ひをれば我宿の萩の葉そよぎ秋風ぞふく

君まつとわがこひをればわが宿のすだれ動かし秋の風ふく（万葉集）

三一三、われのみや分（わび）じとは思ふ花薄ほに出る宿のあきの夕ぐれ

今よりは植ゑてだにみじ花すすきほにいづる秋はわびしかりけり（古今集）

二二〇、風を待草の葉におく露よりもあだなるものは朝顔の花

おきてみむと思ひしほどにかれにけり露よりけなる朝顔のはな（新古今集）

二二二、久かたの空とぶ雁のなみだかも大荒木野の笹の上の露

なきわたる雁の泪やおちつらむもの思ふ宿の萩の上のつゆ（古今集）

二二四、雁のゐる門田の稲葉うちそよぎたそがれ時に秋風ぞふく

夕されば門田の稲葉おとづれて葦のまろやに秋風ぞふく（金葉集）

二二五、和田の原八重の塩路にとぶ雁の翅の浪に秋風ぞふく

はるかなる常世はなれて鳴く雁の雲の衣に秋風ぞふく（月清集）

二二七、鳴わたる雁の羽風に雲消て夜ふかき空にすめる月影

むら雲や雁の羽風にはれぬらむ声きく空にすめる月影（新古今集）

二三二、秋風に山とびこゆる初雁の翅にわくる峯のしら雲

秋かぜに山とびこゆる雁がねの声遠ざかる雲かくるらし（万葉集）

二三五、妻こふる鹿ぞ鳴なる小倉山やまの夕ぎりたちにけむかも

なく鹿のねをのみぞきく小倉山霧たち晴るる時しなければ（新古今集）

二三八、月をのみあはれと思ふをさ夜ふけて深山がくれに鹿ぞ鳴なる

思ふこと有明方の月かげにあはれをそふるさを鹿の声（金葉集）

二四一、さを鹿のおのが住野の女郎花はなにあかずと音をや鳴らむ
妻こふる鹿ぞなくなる女郎花おのが住む野の花と知らずや（古今集）

二四二、萩が花うつろひ行ば高砂の尾の上の鹿のなかぬ日ぞなき
秋はぎの花さきにけり高砂のをのへの鹿は今やなくらむ（古今集）

二四六、山田もる庵にしをれば朝な〳〵たえず聞きつるさを鹿の声
野べちかく家ゐしをれば鶯のなくなる声は朝な朝なきく（古今集）

二五三、秋の夜の月のみやこのきり〴〵す鳴は昔のかげやこひしき
郭公はなたちばなの香をとめてなくは昔の人やこひしき（新古今集）

二五四、蟋蟀なく夕ぐれの秋風に我さへあやな物ぞかなしき
彦星の妻まつよひの秋風にわれさへあやな人ぞこひしき（拾遺集）

二六二、かくて猶たへてしあとはいかゞせむ山田もる庵の秋の夕ぐれ
たへてやは思ひありともいかがせむむぐらの宿の秋の夕ぐれ（新古今集）

二六七、秋風はやゝはだ寒成にけり独やねなむながきこの夜を
今よりは秋風寒くなりぬべしいかでか一人長き夜をねむ（新古今集）

二八二、塩がまの浦ふく風に秋たけてまがきが島に月かたぶきぬ
しほがまの浦ふく風に霧晴れて八十島かけてすめる月影（千載集）

二八六、久堅の月のひかりし清ければ秋のなかばを空に知るかな
数へねど今宵の月のけしきにて秋のなかばを空に知るかな（拾玉集）

二九〇、みよしのの山下風の寒き夜をたれふる里(に)の衣うつらむ
　　み吉野の山のあき風さよふけてふるさとさむく衣うつなり（新古今集）
二九一、独ぬるね覚に聞ぞ哀なる伏見の里に衣うつこゑ
　　ねざめしてきけば物こそ悲しけれとほちの里に衣うつ声（藤原長方集）
二九六、くれて行秋の湊に浮かぶ木の葉あまの釣する舟かとも見ゆ
　　しら浪に秋の木の葉のうかべるをあまのながせる舟かとぞ見る（古今集）
三〇一、雁鳴て吹風さむみ高円の野辺のあさぢは色づきにけり
　　雁がねをききつるなべに高円の野の上の草ぞ色づきにける（万葉集）
三〇三、はかなくて暮ぬと思ふをおのづから有明の月に秋ぞのこれる
　　長月の有明の月はありながらはかなく秋はすぎぬべらなり（後撰集）
三〇九、紅葉葉は道もなきまで散しきぬ我宿をとふ人しなければ
　　わが宿は雪ふりしきて道もなしふみわけてとふ人しなければ（古今集）

（冬部）

三一七、よしの川もみぢ葉ながる滝の上のみふねの山に嵐ふくらし
　　立田川もみぢ葉流る神なびのみむろの山に時雨ふるらし（古今集）
三二一、神無月時雨ふるらしおく山は外山のもみぢいまさかりなり
　　神無月しぐれふるらし佐保山のまさきのかづら色まさりゆく（新古今集）
三二四、ふらぬ夜もふるよもまがふ時雨かな木の葉ののちの嶺の松風
　　今はまたちらでもまがふ時雨かな独りふりゆく庭の松風（新古今集）

三三四、あしの葉は沢べもさやにおく霜の寒き夜な〳〵氷しにけり
　ささの葉はみ山もさやにうちそよぎ氷れる霜をふく嵐かな（新古今集）
三四六、更にけり外山のあらしさえ〳〵て十市の里にすめる月かげ
　ふけにけり山のは近く月さえてとをちの里に衣うつこゑ（新古今集）
三四七、雲ふかきみ山のあらしさえ〳〵て生駒の嶽に霰ふるらし
　冬深み外山のあらし冴えさえて裾野のまさき霰ふるなり（千五百番歌合）
三五四、夜をさむみ浦の松風吹すさび虫明の浪に千鳥鳴なり
　虫明の松ふく風や寒からむ冬の夜ふかく千鳥なくなり（拾遺愚草）
三五六、風寒み夜の深行けば妹が島かたみの浦に千鳥なくなり
　うば玉の夜のふけ行けば楸生ふる清き河原に千鳥なくなり（新古今集）
三五九、難波がた塩ひにたてる蘆たづの羽しろたへに雪ぞ（は）ふりつゝ
　梅が枝になきてうつろふ鶯のはね白妙に泡雪ぞふる（新古今集）
三六九、深山には白雪ふれりしがらきのまきの杣人道たどるらし
　都だに雪ふりぬればしがらきのまきの杣山みちたえぬらむ（金葉集）
三七〇、巻向の檜原のあらしさえ〳〵て弓月が嶽に雪ふりにけり
　衣手によこの浦風さえさえてこだかみ山に雪ふりにけり（金葉集）
三八〇、冬ごもりそれとも見えず三輪の山杉の葉白く雪のふれれば
　梅の花それともみえず久方の天ぎる雪のなべてふれれば（古今集）
三八三、故郷はそらさびしともなき物を吉野の奥の雪の夕ぐれ

さびしさを何にたとへむ世を捨つる吉野のおくの雪の夕暮（拾玉集）

三九二、身につもる罪やいかなるつみならむ今日降雪と共に消ななむ
年の内につもれる罪はかきくらしふる白雪と共に消えなむ（拾遺集）

三九七、足引の山より奥に宿もがな年退くまじき隠家にせむ
み吉野の山のあなたに宿もがな世のうき時のかくれがにせむ（古今集）

（恋部）

四一三、夏ふかき杜の空蟬おのれのみむなしき恋に身をくだくらむ
打はへてねをなきくらすうつせみのむなしき恋もわれはするかな（後撰集）

四一四、我宿の籬のはたてに這ふ瓜のなりもならずもふたり寝まほし
麻生の浦に片枝さしおほひなる梨のなりもならずもねて語らはむ（古今集）

四一六、鵲の羽におく露の丸木橋ふみみぬさきに消えやわたらむ
おそろしや木曽のかけぢの丸木橋ふみみるたびにおちぬべきかな（千載集）

四一七、さ夜更て雁の翅におく霜のきえても物は思ふかぎりを
冬の池の鴨の上毛におく霜のきえてもの思ふ頃にもあるかな（後撰集）

四一八、逢事を雲井のよそに行雁の遠ざかればや声もきこえぬ
あしべより雲ゐをさしてゆく雁のいや遠ざかるわが身悲しも（古今集）

四二〇、はみのぼる鮎すむ川の瀬をはやみ早くや君に恋渡りなむ
よしの川岩浪たかくゆく水の早くぞ人を思ひそめてし（古今集）

四二三、秋の野の花の千種に物ぞおもふ露よりもしげき色は見えねど

秋の野にみだれてさける花の色の千種にものを思ふ頃かな（古今集）

四二四、物思はぬ野辺の草木の葉にだにも秋のゆふべは露ぞおきける

われならぬ草葉もものは思ひけり袖よりほかにおける白露（後撰集）

四三〇、夜を寒み鴨の羽がひにおく霜のたとひ消ぬとも色に出でめや

秋萩の枝もとををにおく露の消なばけぬとも色に出でめやも（万葉集）

四四四、沖つ島鵜のすむ石による浪のまなく物おもふ我ぞかなしき

あべのしま鵜のすむ石による浪のまなくこのごろ大和し思ほゆ（万葉集）

四四五、かもめゐるあら磯の洲崎塩みちてかくろひ行ばまさる我恋

奥つ島ありその玉藻潮みちてい隠ろひなばおもほえむかも（万葉集）

四四八、山川の瀬々の岩波わきかえりおのれひとりや身をくだくらむ

風をいたみ岩うつ浪のおのれのみ砕けてものを思ふ頃かな（詞花集）

四四九、石はしる山下たぎつ山川の心くだけて恋やわたらむ

足引の山したたぎつ岩浪のこころくだけて人ぞこひしき（新古今集）

四五三、余所にてもあるべきものを中々に何しか人にむつれそめけむ

東路のさやの中山なかなかに何しか人をおもひそめけむ（古今集）

四五九、海人衣田簑の島に鳴たづの声きゝしよりわすれかねつも

難波がた汐みちくらし海人衣たみのの島にたづなきわたる（古今集）

四六一、あふ坂の関屋もいづら山しろの音羽の滝の音にきゝつゝ

音羽山おとにききつつあふ坂の関のこなたに年をふるかな（古今集）

四六二、広瀬川袖つくばかり浅けれど我は深めておもひ初めてき
広瀬川袖つくばかり浅きをや心ふかめてわが思へらむ（万葉集）
四六八、富士のねの煙も空に立つものをなどか思ひの下にもゆらむ
富士のねの煙もなほぞ立ちのぼる上なきものは思ひなりけり（新古今集）
四六九、白山にふりてつもれる雪なれば下こそ消ゆれ上はつれなし
難波女のすく藻たく火の下こがれ上はつれなきわが身なりけり（千載集）
四七三、涙こそゆくへもしらねみわの崎佐野の渡りの雨の夕ぐれ
心こそゆくへも知らねみわの山杉の梢のゆふぐれのそら（新古今集）
四八二、わたつみに流れ出たるしかま川しかもたえずや恋わたりなむ
わたつみの海にいでたるしかま川たえむ日にこそ吾が恋やまめ（万葉集）
四九〇、沖つ波うち出の浜のはまひさぎしをれてのみや年をへぬらむ
君こふとなるみの浦の浜久木しをれてのみも年をふるかな（新古今集）
四九一、君により我とはなしに須磨の浦にもしほたれつゝ年をへぬらむ
わくらはにとふ人あらばすまの浦にもしほたれつつわぶと答えよ（古今集）
四九九、我恋は夏野の薄しげゝれど穂にしあらねば問ふ人もなし
わが恋はみ山がくれの草なれや繁さまれどしる人のなき（古今集）
五〇三、わが恋はあはでふる野の小篠原いくよまでとか霜のおくらむ
いそのかみ布留野の小笹霜をへて一夜ばかりに残る年かな（新古今集）
五一五、さ筵にいく世の秋を忍きぬ今はたおなじ宇治の橋姫

さむしろに衣かたしき今宵もやわれをまつらむ宇治の橋姫（古今集）

五一七、みちのくの真野のかや原かりにだにこぬ人をのみ待が苦しき

山城の淀のわかごもかりにだにこぬ人たのむわれぞはかなき（古今集）

五一九、忍ぶれば苦しきものを山の端にさし出る月のかげに見えなむ

我妹子しわれを思はばまそ鏡てりいづる月の影にみえこね（万葉集）

五二九、時鳥来なく五月の卯の花のうきことの葉のしげきころかな

こがらしの風にもみぢて人しれずうき言の葉のつもる頃かな（新古今集）

五四〇、雲がくれ鳴て行なる初雁のはつかに見ても人は恋しき

おく山の峯とびこゆる初雁のはつかにだにも見でややみなむ（新古今集）

五四一、秋の野に朝霧がくれ鳴く鹿のほのかにのみや聞き渡りなむ

天雲の八重雲がくり鳴る神の音にのみやもききわたりなむ（万葉集）

五四六、別にしむかしは露があさぢ原跡なる野べに秋風ぞふく

思ひかね別れし野べをきてみれば浅茅が原に秋かぜぞふく（詞花集）

五四七、三島江や玉江のま菰みがくれてめにしみえねば刈る人もなし

みしま江の入江のまこも雨ふればいとど萎れて刈る人もなし（新古今集）

五五五、里はあれて宿は朽にし跡なれや浅茅が露に松虫のなく

里は荒れて人はふりにし宿なれや庭もまがきも秋の野らなる（古今集）

五六一、秋の田の穂のうへにすがくさゝがにの絲われば刈り物は思はじ

たなばたは空に知るらむささがにのいとかくばかり祭る心を（拾遺集）

（雑部）

五六四、玉鋒のみちは遠くもあらなくに旅とし思へばわびしかりけり
　里さかり遠からなくに草枕旅として思へばなほ恋ひにけり（万葉集）

五七〇、湊風いたくな吹そしながとり猪名のみづうみ舟とむるまで
　大海にあらしな吹きそしながどり猪名の港に舟泊つるまで（万葉集）

五七四、野辺わけぬ袖だに露はおくものをたゞ此ごろの秋の夕暮
　秋の野の草もわけぬをわが袖のもの思ふなべに露けかるらむ（後撰集）

五七八、ひとりふす草の枕の夜の露はともなき鹿の泪なりけり
　よもすがら草の枕におく露はふるさと恋ふる泪なりけり（金葉集）

五九七、夜を寒み独ね覚の床さえて我衣手に霜ぞおきける
　昔おもふ夜半のねざめの床冴えて涙も氷る袖のうへかな（新古今集）

六〇二、岩ねふみ幾重の峯を越ぬとも思ひも出むこゝろへだつな
　白雲の八重にかさなるをちにても思はむ人に心へだつな（古今集）

六一〇、思ひ出よ見しよはよそに成ぬともありし名残の有明の月
　忘るなよ今は心のかはるともなれしそのよの有明の月（新古今集）

六一八、いにしへの神代のかげぞ残りける天の岩戸のあけがたの月
　天の戸をおしあけ方の雲間より神代の月の影ぞ残れる（新古今集）

六二一、男山神にぞぬさを手向つる八百万代も君がまに〳〵
　みそぎして思ふことをぞ祈りつる八百万代の君がまにまに（拾遺集）

六二二、八幡山木たかき松の種しあれば千とせののちも絶えじとぞ思ふ
　二葉より頼もしきかな春日山木高き松の種ぞと思へば（拾遺集）
六二四、八幡山木たかき松にゐる鶴のはね白妙にみ雪ふるらし
　梅が枝になきてうつろふ鶯のはね白妙にあわ雪ぞふる（新古今集）
六二七、葵草かづらにかけて千はやふる賀茂の祭を練るは誰が子ぞ
　しろかねの目抜の太刀をさげはきて奈良の都をねるは誰が子ぞ（拾遺集）
六三〇、住吉の岸の姫松ふりにけりいづれの世にか種はまきけむ
　あづさゆみ磯べの小松たが世にか万代かけて種をまきけむ（古今集）
六三七、み熊野のなぎの葉しだり雪降ば（ふる雪は）神のかけたる四手にぞ有らし
　住の江の松に夜深くおく霜は神のかけたる木綿かづらかも（源氏物語）
六四四、千はやふる伊豆のお山の玉椿八百よろづ代も色はかはらじ
　ちはやふる賀茂の社の姫小松万世ふともいろはかはらじ（古今集）
六四六、いそのかみ古き都は神さびてたゝるにしあれや人もかよはぬ
　いそのかみふりにし恋の神さびて祟るにわれはいぞねかねつる（古今集）
六五三、世中は鏡にうつる影にあれやあるにもあらずなきにもあらず
　世の中は夢かうつつか現とも夢とも知らず有りて無ければ（古今集）
六七三、万代に見るとも飽かじ長月の有明の月のあらむかぎりは
　よろづ代に見ともあかめやみ吉野の滝つ河内の大宮所（万葉集）
六七四、朝にありて我代はつきじ天の戸や出る月日の照らむかぎりは

君が代は千代ともささじ天の戸やいづる月日の限りなければ（新古今集）

六七六、宮柱ふとしき立てて万代に今ぞさかえむ鎌倉のさと

ふだらくの南の岸に堂立てて今ぞ栄えむ北の藤なみ（新古今集）

六七七、黒木もて君がつくれる宿なれば万世経とも古りずも有なむ

はたすすき尾花さか葺き黒木もて造れる宿は万世までに（万葉集）

六八一、ひんがしの国にわがをれば朝日さすはこやの山の影となりにき

万代ときはかきはに頼むかなはこやの山の君がみかげを（拾遺愚草）

六八六、さりともと思う物から日をへては次第々々に弱るかなしき

さりともと思ふ心も虫のねも弱りはてぬる秋のくれかな（千載集）

六八九、いづくにて世をばつくさむ菅原や伏見の里も荒ぬという物を

いざここにわが世はへなむ菅原や伏見の里の荒れまくも惜し（古今集）

六九六、大海の磯もとゞろによする波われてくだけて裂けて散るかも

伊勢の海の磯もとどろによする浪かしこき人に恋ひわたるかも（万葉集）

ききしよりものを思へばわが胸はわれて摧けてとどころもなし（万葉集）

六九九、いつもかく淋しき物か蘆の屋にたきすさびたる海士の藻塩火

靡かじなあまの藻しほ火たきそめて煙は空にくゆりわぶとも（新古今集）

七〇八、空蟬の世は夢なれや桜花咲ては散りぬあはれいつまで

はかなさを外にもいはじ桜花咲きては散りぬあはれ世の中（新古今集）

七〇九、いにしへの朽木の桜春ごとにあはれ昔と思ふかひなし

道のべの朽木の柳春くればあはれ昔としのばれぞする（新古今集）

（金槐集の歌は貞享四年板本を底本としている岩波の古典大系本によった。）

以上の一六三首の歌は、あくまでも「二句と三・四字以内」という点からのみ見たものであり、これらの歌の中には、確かに二句と三・四字という範囲内で本歌取を実行していながら、その歌の韻律が、本歌の韻律に非常によく似ている歌もみられる。定家は、本歌取に関して韻律のことは言っていないようであるが、やはり取っている字句の数の上から考えると同時に、韻律の上からも本歌との関係を考慮することが必要であろうと思う。実朝の本歌取の歌には、上句あるいは下句の調子が、本歌と同じという歌はたくさんみられるのであるが、次にあげる歌のごとく、一首全体の韻律が本歌と同じである場合には、本歌取の歌というよりはむしろ模倣歌に近くなってしまうと考えられる。

（一首全体の韻律が本歌の韻律と同じもの）

四七、みよしのの山したかげの桜花咲きてたてりと風にしらすな
　足引の山がくれなるさくら花ちり残れりと風に知らるな

一一二、故郷の池の藤なみたれ植てむかしわすれぬかたみなるらむ
　いそのかみふる野の桜たが植ゑて春は忘れぬかたみなるらむ

一八一、ながむれば衣手さむし夕月夜佐保の川原のあきの初風
　ながむればころもで涼し久方の天のかはらの秋の夕ぐれ

二二四、雁のゐる門田の稲葉うちそよぎたそがれ時に秋風ぞふく
　夕されば門田の稲葉おとづれて葦のまろやに秋かぜぞふく

三一七、よしの川もみぢ葉ながる滝の上のみふねの山に嵐ふくらし
　立田川もみぢ葉流る神なびのみむろの山に時雨ふるらし
三二四、ふらぬ夜もふるよもまがふ時雨かな木の葉ののちの嶺の松風
　今はまたちらでもまがふ時雨かな独りふりゆく庭の松風
三五六、風寒み夜の深行けば妹が嶋かたみの浦に千鳥なくなり
　うば玉の夜のふけ行けば楸生ふる清き河原に千鳥なくなり
三七〇、巻向の檜原のあらしさえ〳〵て弓月が嶽に雪ふりにけり
　衣手によこの浦風さえさえてこだかみ山に雪ふりにけり
四六二、広瀬川袖つくばかり浅けれど我は深めておもひ初めてき
　広瀬川袖つくばかり浅きをや心ふかめてわが思へらむ
四七三、涙こそゆくへもしらねみわの崎佐野の渡りの雨の夕ぐれ
　心こそゆくへも知らねみわの山杉の梢のゆふぐれのそら
五七〇、湊風いたくな吹きそしながとり猪名のみづうみ舟とむるまで
　大海にあらしな吹きそしながとり猪名の港に舟泊つるまで
六八九、いづくにて世をばつくさむ菅原や伏見の里も荒ぬという物を
　いざここにわが世はへなむ菅原や伏見の里の荒れまくも惜し

しかもこれらの歌は、春歌→春歌（四七・一一二）、秋歌→秋歌（一八一・二二四）、冬歌→冬歌（三一七・三二四・三五六・三七〇）、恋歌→恋歌（四六二・四七三）、雑歌→雑歌（五七〇・六八九）という工合に、本歌の部類をそのまま踏襲してよんでおり、それゆえ

に一層、本歌との類似をまぬがれない歌となっていると思われる。それでは、定家の説く「以三四季歌一詠三恋雑歌一、以三恋雑歌一詠三四季歌二」・「五句之中及三三句一者頗過分無三珍気二二句之上三四字免レ之」という二条件にあてはまる歌、すなわち、四季の歌を本歌とした場合には恋雑の歌に詠みかえ、恋雑の歌を本歌とした場合には四季の歌に詠みかえる、と同時に、二句と三・四字の範囲内でしか本歌の語句を取ることをしていないという歌が、金槐集に何首あるかというと、先にあげた一六三首のうち、次の七二首の歌が、定家的な意味における本歌取にかなう歌としてあげられると思う。(八)(一〇)(一六)(二四)(二五)(二六)(三二)(三七)(三八)(五〇)(五九)(六〇)(六六)(六八)(七一)(九〇)(一〇三)(一一〇)(一一一)(一一五)(一三六)(一三八)(一四九)(一七一)(一七二)(一七五)(一八三)(一八四)(一九〇)(二〇三)(二〇七)(二〇九)(二一二)(二四六)(二五三)(三〇九)(三四六)(三五九)(三九七)(四一三)(四一四)(四一六)(四一七)(四二四)(四三〇)(四四四)(四四五)(四五九)(四九一)(五〇三)(五二九)(五四六)(五四七)(五五五)(五六一)(五六四)(五七四)(五七八)(五九七)(六〇二)(六一〇)(六二一)(六二二)(六二四)(六二七)(六四四)(六七四)(六七六)(六八六)(六九六)(六九九)(七〇八)

このように、実朝は定家の指導によって、熱心に本歌取の技法をも試みているのであるが、なかには、いまだ本格的な本歌取の歌となっていないものも多いようである。しかし、当時の歌壇にあっては、相当広い範囲で本歌取を認めていたようであり、そのことは、実朝の本歌取の歌が、新勅撰集以下の勅撰集にそれぞれ入集していることからもうなづけるのである。(既出のものは本歌を省略)

(玉　葉　集) うちなびき春さりくればひさぎ生ふるかた山かげに鶯ぞなく
　　うち摩く春さりくれば笹のうれに尾羽うちふれて鶯なくも (万葉集)
(新千載集) 春はまづ若菜つまむと占めおきし野辺とも見えず雪のふれれば
(新勅撰集) 春きては花とかみえむおのづから朽木の杣にふれる白雪
(続拾遺集) 誰にかもむかしをとはむ故郷の軒ばの梅は春をこそしれ

（続後撰集）梅花色はそれともわかぬまで風にみだれて雪はふりつゝ
（風　雅　集）春ふかみ嵐の山のさくら花咲と見しまに散にけるかな
（続後撰集）いとはやも暮ぬる春か我宿の池の藤なみうつろはぬまに
（新勅撰集）玉もかる井でのしがらみ春かけて咲や川瀬のやまぶきの花
（新勅撰集）故郷のもとあらの小萩いたづらに見る人なしみさきか散るらむ

高円の野べの秋萩いたづらに咲きか散るらむみる人なしに（万葉集）

（新勅撰集）路のべの小野の夕霧たちかへり見てこそ行かめ秋萩の花
（玉　葉　集）たそがれに物思ひをれば我宿の荻の葉そよぎ秋風ぞふく
（新勅撰集）和田の原八重の塩路にとぶ雁の翅の浪に秋風ぞふく
（新後拾遺集）ふらぬ夜もふるよもまがふ時雨かな木の葉ののちの嶺の松風
（続後拾遺集）雲ふかきみ山のあらしさえ〳〵て生駒の嶽に霰ふるらし
（新勅撰集）風寒み夜の深行けば妹が島かたみの浦に千鳥なくなり
（風　雅　集）深山には白雪ふれりしがらきのまきの杣人道たどるらし
（風　雅　集）巻向の檜原のあらしさえ〳〵て弓月が嶽に雪ふりにけり
（新拾遺集）かれはてむ後しのべとや夏草のふかくは人のたのめおきけむ

かれはてむ後をば知らで夏草の深くも人のおもほゆるかな（古今集）

（新勅撰集）わが恋はあはでふる野の小篠原いくよまでとか霜のおくらむ
（続古今集）秋の野に朝霧がくれ鳴く鹿のほのかにのみや聞き渡りなむ
（続後撰集）千はやふる伊豆のお山の玉椿八百よろづ代も色はかはらじ

（続古今集）宮柱ふとしき立てて万代に今ぞさかえむ鎌倉のさと

以上考察してきた事柄をまとめてみると、次のように言うことができると思う。

一、本歌取の盛んであった新古今時代に生きた実朝は、自からも多くの本歌取の歌を詠んでおり、貞享本金槐集（七一六首）のうち、一九五首（二七％）は、本歌取の歌と認められる。

一、実朝は、定家より贈られた近代秀歌その他の歌論書によって、熱心に作歌に励んだものと思われるが、本歌取に関しても、近代秀歌や詠歌大概に説くところより、多くその技法を学びとったものと思われる。それは、両書において、ふたたび詠むことを禁じている「年の内に春はきにけり」「そでひぢてむすびし水」「月やあらぬ春やむかしの」「さくらちるこのしたかぜ」「ほの〴〵とあかしの浦」などの句を、実朝は一句も自分の歌に詠んでいないということ、さらに、近代秀歌および詠歌大概に、それぞれ秀歌例・秀歌之躰大略として挙げられている諸歌を、本歌として詠んだ歌が金槐集中にあること（一七・一〇三・二二二・二二四・三一七・三四九・三五九・三八〇・四九一・五〇三・六〇二・六〇三・六二四）等々から、実朝がいかによくそれらの書を読んでいたかが分かるのである。

一、金槐集の本歌取の歌一九五首のうち、定家の説く二句と三・四字以内で、本歌の句をとっているものは一六三首（八四％）、さらに、本歌の歌を他の部類の歌によみかえ、かつ二句と三・四字以内で本歌の句をとっているものは七二首（三七％）ある。

一、実朝の本歌取の歌の中には、本格的な本歌取となっていないものもみられるのであるが、当時は相当に寛大に本歌取が認められていたと思われる。勅撰集に入集している実朝の歌九五首のうち、二二首は本歌取の歌となっている。（二三％）